

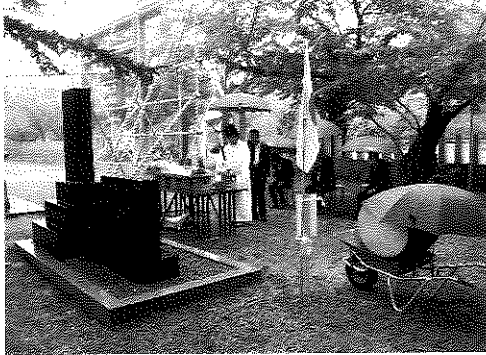
青森県偕行会

軍艦「津軽」慰霊祭に参列

青森県偕行会事務局長

稲村 孝司 陸自75

青森県偕行会は、6月29日、青森県護国神社の軍艦津軽顕彰碑前で齋行された「軍艦津軽第十九回慰霊祭」に参列した。



軍艦津軽慰霊祭

よる規模縮小で5名が参列した。神事は、修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上の儀、祭文奏上の儀、玉串奉奠の儀、撤饌の儀が厳粛に進められた。

生憎の曇り空であったが、祭壇、国旗、軍艦旗の掲揚等が滞りなく終わり、いざ開式となった途端、小雨がぱらつき始め急遽傘をさしての進行となった。終了間際に雨が止み、後片付けは両手を使つての作業となり御霊に感謝した。

軍艦津軽の艦歴は、最新鋭機雷敷設艦として、昭和15年横須賀市にて進水、大東亜戦争開戦直前の昭和16年10月に艦装を終えて就役した。就役に際し、初代艦長稲垣大佐は「こ青森県護国神社にて武運長久を祈願し、神霊を預かつて津軽艦の守り神とされた。これを縁として慰霊祭が行われる由来となった。

軍艦津軽は、昭和19年6月29日、ピアク島への兵員及び物資輸送の後、マニラに向かう途中、米海軍潜水艦ダーダの雷撃を受けて撃沈された。

本慰霊祭の祭王を務めた福眞睦城氏は、海軍エースパイロットの祖父から、かつてトラック島に進出した折、津軽が敵機を引き付けるだけ引き付けて機銃を一齐に発射し機を撃墜した話などを聞いていた。

祖父福眞吉次氏は、旧制弘前中学校を卒業後、民間の飛行機乗りとして飛

んだ。日中戦争の激化に伴い、海軍に応召。中国戦線に長く従軍し、主に爆撃機「一式陸上攻撃機」に搭乗した。大東亜戦争開戦後は南方の戦線で戦い、昭和17年にはラバウル海軍航空隊に転属。同年11月の珊瑚海海戦で撃墜されたが、捕鯨船に助けられ帰還し治療のため内地帰還となった。

福眞吉次氏は、昭和20年8月19日、木更津飛行場から伊江島まで陸軍参謀本部次長河辺虎四郎中将以下16名の「敗戦の使者」を「全体を白色に塗られ胴体両側並びに各翼の上下部に緑の十字を附した一式陸上攻撃機」により輸送したパイロットでもある。ポツダム宣言受諾直後であり、厚木海軍航空隊始め、敗戦を認めない軍人が同機を撃墜する恐れがあり、パイロットは特に歴戦のエースが求められた。

8月20日伊江島を離陸後、燃料不足により木更津までは飛べないことから、静岡県天竜川河口から3km東側の鮫島海岸に不時着した。その後、河辺中将以下の敗戦の使者は21日浜松飛行場から陸軍調布飛行場に帰還した。

8月30日、唯一武装解除を免れた憲兵隊等の警備の中、マッカーサー元帥が厚木飛行場に降り立った。

戦後75年、マッカーサー元帥始め米軍を恐れさせた靖国神社御英霊は、同元帥の押しつけた憲法を変えられないことを残念に思っていることでしょう。